愛知教育大学研究報告，41（教育科学編），pp. 129～139, February, 1992

学生における自己の知的側面に関する意識

―予備的調査研究―

竹　内　謙　彰

（心理学教室）

Preliminary study on the mental aspects of self-awareness in undergraduate students

Yoshiaki TAKEUCHI

(Department of Psychology)

問　　題

今日の青年，あるいは大学生は，知的であるということ，言い換えれば，「頭がいい」とか「かしこい」といったことに対して，それをどのように捉え，どの程度の価値を見いだしているのであろうか。

一般的に言えば，「頭がいい」とか「かしこい」というのは，価値志向的な表現であり，大半の青年に対して，それまでの成長の過程における様々な教育の機会を通じて，かしこくあることへの社会的な強化，促進が図られてきていると考えることができる。

ただし，今日の日本においては，知的であることへの強化，促進が，青年自身が自らの必要性に応じて学び，意志決定できる主体として成長する，という方向とは，必ずしも一致しない方向性を持っているように思われる。

知的であることへの方向づけは，上級学校への進学のための競争，いわゆる受験競争によって動機づけられる側面が強いのが日本の現状であろう。そのため，自らの欲するところによって学ぶという習慣を獲得することが容易ではなく，受験の必要から学ぶ，という習慣を日常化してしまうことになるのではなかろうか。それゆえ，大学にまで進学してしまうと、知的であることへの動機づけが弱まり，学ぶ意欲を見いだすことができなくなってしまう，という事態が生じることになる。

こうした傾向は，いくつかの手続き上の見直しはあれ，上級学校への進学のための制度が，基本的にはここ数十年変化していない，という状況のもとで，また，高等教育の大衆化という別の要困ともあいまって，より一層拍車がかかってきているといってよい。大学生協などでの専門書の売行きが年々低下して行く傾向にあることや，大学生の学習時間の減少傾向などが，この間の事情をよく反映しているように思われる。

もっとも，当然のことではあるが，知的であるということが，今日の大学生にとっても

価値的でないとは言えないであろう。ただ，価値あると考えられる「かしこさ」の内容は，先行世代とは異なってきている可能性がおおいにあるのではないだろうか。

ただ，世代間の比較などは，大規模な調査を要することであり，将来的にはそうしたことも視野にいれた研究に発展させる展望を持っておきたいが，今回はさしあたり，今日の学生が自己の知的側面をどの様に捉えているかを探索的に検討することを企図した。つまり，本研究は，今日の学生の知的側面に関する自己意識のあり方を検討することを目的としてなされた，予備的な調査研究である。

自己意識の知的側面を評定する語としては，先行研究では必ずしも適当なものがみられなかったので，Azuma & Kashiwagi（1987）が，仮想された「頭のいい人」を評定するのに用いた67個の評定語を用いることとした。

ところで，学生の自己概念を，因子分析を用いて検討した日本の研究のひとつに，山本・松井・山成（1982）の調査研究がある。彼らの研究では，自己認知の諸側面に関する78の質問項目と，自己評価（自尊感情）得点との関連を分析している。78の質問項目からは，11個の因子が抽出され，その中に，「知的能力に自信」「物事を知っている」「頭の回転が速い」などの項目で代表される，「知性」と名付けられた因子が見いだされている。この知性因子は，本研究で問題にしている，自己意識の知的側面に当たるものだと考えてよいであろう。この知性因子に基づく尺度得点と自己評価得点との関連（重回帰分析に基づく）は，男子では有意であったが，女子では，有意な関連がみられていない。この結果は，「知的であること」が自分にとってどの程度価値を持つか，という点で男女間に差がみられることを示している。

本研究では，自己の知的側面を，より多くの項目を用いて，多面的に検討するとともに，自己の知的側面と自尊感情との関連をみることで，自己の知的特徴の中でも何を学生たちが価値あるものと捉えているかを検討する。あわせて，そこにみられる男女間の差の問題についても検討を加えたい。結果の予想としては，男子の場合，抽出された各知的側面を代表する因子と自尊感情が全般的に有意な関連を持つのに対して，女子では，抽出された因子毎に自尊感情との関連が異なっていることが考えられる。その理由は，知性化への社会的促進が，男子に対してより女子に対しての方が，弱く，又一面的である傾向がある，と考えられるからである。

また，本研究では，自己の知的側面と関連を持つであろうと考えられる変数として，知能の可変性に関する意識(知能は固定的なものか発展的なものか)，及び，測定される知的能力を取り上げることとした。知的な特徴がどのような起源を持つか，つまり，もともと持っていたものなのか，あるいは獲得してきたものなのか，に関する考え方と，自己意識の知的側面との間には，なんらかの関連がみられるのではないか。また，performance としての知的能力と，意識上で捉えられた自己の知的側面との間にも，なんらかの関連があると考えられる。いずれも，現時点においては，結果の明確な予想は立てられないが，先行研究が少ない中では，こうしたデータを提出すること自体に意義があるものと考えられる。

まとめよう。本研究では，自己意識の知的側面（以下，知的自己意識と呼ぶ）について，以下の諸点から検討を行った。

1）知的自己意識は調査対象となった学生においてどの様な特徴を示し，またどのよう

な因子構造を持つのか，

2）知的自己意識は自尊感情とはどんな関係があるか，

3）知的自己意識は知的能力の可変性に関する考え方とはどんな関係があるか，

4）知的自己意識と実際の知的能力とはどんな関係があるか，

の，4点である。

方　　法

被験者：愛知教育大学の学生（1～3年）130名（男子61名，女子69名），及びA女子短大の学生53名の，計183名。

課題：1）質問紙による調査　3種類の質問項目群を1冊の冊子にまとめたものを用いた。質問紙による調査は全被験者を対象とした。以下に各項目群を説明する。

①知的自己意識尺度：第1の質問項目群は，「文章がうまい」「常識がある」「動作が機敏」といった，頭の良さに関係があると考えられる特徴を記述した短文が，自分にとってどの程度当てはまるかを，「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4段階のいずれかを選ぶことによって評定するというものである。ここで用いられた項目（短文）は67個あり，Azuma & Kashiwagi（1987）が，「頭のいい人」の特徴を抽出するために用いた項目をそのまま借用したものである（なお，上記論文は英文のため，実際に用いた項目は東（1989）の著作によった。項目内容は，付表を参照されたい）。

②自尊感情尺度：Rosenberg（1965）によって作成された10項目からなる尺度を自尊感情の測定のために用いた。この項目にはいくつかの邦訳があるが，ここでは中川（1986）によるものを用いた。各項目の短文がどの程度自分に当てはまるかを「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4つの内のいずれかを選択することによって回答するものである。項目内容は以下の通り：

・だいたい私は自分に満足している
・ときどき私は駄目な人間だと思う（逆転項目）
・私には長所がたくさんあると思う
・私はふつうの人と同じくらいの力量は持っていると思う
・私はじつは使い道のない人間だと思うことがある（逆転項目）
・私はこれだけは誇りにしていいと思うものをあまりもっていない（逆転項目）
・私は少なくとも他の人たちと同じように生きる価値はあると思う
・私はもっと自分を尊重する気になれないものだろうかと思う（逆転項目）
・結局のところ私は人生の落伍者だと思いたくなる（逆転項目）
・私は自分自身を積極的に生かしている

この尺度について，本研究で独自に因子分析を行ったところ，主因子法により固有値1.0以上を基準として2因子まで抽出されたが，全ての項目が第1因子に高い負荷を示しており，1項目のみ第1と第2因子の負荷が同程度であった。この結果より，本尺度がほぼ1因子構造を示すものと考えて，全項目得点を合計したものを自尊感情尺度得点とすることとした。この得点が高い者ほど，自己全体を肯定的に捉え，自己を高く評価していると解

釈される。

③固定・発展型知能観尺度：頭の良さが固定的であるか発展的であるかについての意識を探るために用いられたもので，10項目からなる。各短文に対し「そう思う」「少し思う」「あまり思わない」「そう思わない」の4つの内のいずれかを選ぶことによって回答するものである。杉村・吉崎（1990）が，作成したもので，各5項目ずつの合計得点が，それぞれ固定的知能観尺度得点，発展的知能観尺度得点とされるものである。本研究でも独自の因子分析を行い，主因子法で固有値1.0以下を基準として3因子が抽出され，ヴァリマックス回転がなされた。本研究では，この結果に基づき，回転後の第1因子に負荷の高い5項目の得点合計を固定的知能観尺度得点とし，第2及び第3因子に高い負荷をもつ5項目の得点合計を発展的知能観尺度得点とした。各尺度の項目は，以下の通り：

〈固定的知能観尺度〉

・「頭のよさは，生まれたときから決まっている」と思いますか
・「頭のいい人は，なんでもよくできる」と思いますか
・「子どものとき頭のいい人は，大きくなっても頭がいい」と思いますか
・「親の頭がいいと，子どもの頭もいい」と思いますか
・「頭のよさはずっとかわらない」と思いますか

この得点が高いほど，頭の良さは，固定的であると考える傾向が強いことを示す。

〈発展的知能観尺度〉

・「がんばっても頭はよくならない」と思いますか（逆転項目）
・「がんばれば，頭はある程度よくなる」と思いますか
・「がんばれば，頭はいくらでもよくなる」と思いますか
・「頭のいい人は，よくがんばっている人である」と思いますか
・「がんばらなくては，頭はよくならない」と思いますか

この得点が高いほど，頭の良さは，努力すればよりよくなると考える傾向が強いことを示す。

2）知能検査：実際の知的能力と質問紙調査の結果の関連を検討することを目的として，京大NX_{15-}知能検査が実施された。ただし，本研究で検討されるのはA短大のデータのみである（愛知教育大学の学生の一部にも実施したが，データ数が19と少なく相関的分析に適しないと考え今回の報告は割愛した）。この知能検査は Thurstone の多因子説に基づいて構成されており，相互に比較的独立した知的能力が測定されるように構成されている。下位検査は全部で12である（下位検査の名称は Table 4 参照）。

手続き：いずれの課題も，講義時間の一部を利用して実施された。教示その他の注意は，すべて筆者が行った。実施期間は，1991年5月～7月。

結果と考察

1）自己意識の知的側面に関する特徴

1）得点上位5項目，下位5項目の検討

まず，被験者となった大学生・短大生が，どの様な特徴を最も自分によく当てはまるものとみているのか，また逆に，どの様な特徴が最も自分に当てはまらないものとみているのか，という点を検討するために，学校別，男女別に，各項目得点の平均が最も高いものから順に5項目，最も低いものから順に5項目をそれぞれ取り出し，比較した(Table 1)。

上位5項目を見ると，3つの被験者群間で重なり合う項目が多いことがわかる。得点のトップは3群共に「好奇心旺盛」であり，現代の学生気質をうかがわせる結果である。それ以外では「思いやりがある」「誤りを素直に認める」「人の立場にたって考える」の3項目が3群間で共通していることがわかる。この3項目は，後に触れるように，いずれも「受容的な社会的有能性」に関する項目だと考えられる。これは被験者となった学生が共通して，自分は他者に対して受容的で共感的である傾向が強い，と自己評定していることを示している。これも，やさしさ世代と言われる現代の学生の特徴を示すものかも知れない。ただ，比較すべき他世代のデータがないので，こうした解釈は今のところ単なる類推の域を出ない。

上位5項目の内，多くは被験者群間で共通するものであったが，異なる項目としては，「常識がある」が男子でのみ見られ，「いつも明るい」は女子の2群で見られた。

一方，下位5項目を比較検討すると，上位5項目とは異なり，共通する項目は少ない。ただし，「よく勉強する」だけは3群間で共通している。これは，どの学生も，概して，自分はよく勉強する方ではない，と考えていることを示しているわけで，教育をする立場にある筆者としては，やや思いは複雑である。なお，愛教大の学生は，「顔がキリッとしている」「多芸」の2項目が男女に共通している。これは，後者については本学の学生の特徴が出ている様に思われる。

各被験者群で特徴のある項目を見ると，愛教大男子では「字がきれい」「筆まめ」「文章がうまい」といった，読み書きの習慣や能力に関する項目が目だつ。読み書きに関することに苦手意識を持っているようである。愛教大の女子のみに見られる項目は，「時間の使い方がうまい」「芸術的センスがある」の2つである。A短大では，最も得点が低いのは「感情表現が少ない」であるが，やはり，これはこの群の特徴を示しているように思われる。少なくとも愛教大の学生と対比してみたときには，A短大の学生は喜怒哀楽の表現が豊かである。それ以外の項目は，「学校の成績がいい」「知識豊富」「理路整然と話す」の3つあり，いずれも狭い意味での頭の良さに関する項目だと考えられるものである。ある種の知的能力に関して劣っている意識（劣等感）があるのかも知れない。

2）因子分析結果の検討

次に，知的自己意識の項目得点をもとに因子分析を行った。ただし，本来であれば，67項目全てを分析対象とすべきであるが，そうした場合，使用した統計ソフト（ＳＰＳＳ／ＰＣ＋）の記憶要領の限界を越えたため，次善の策として，Azuma & Kashiwagi (1987) が，「頭のいい人」を評定対象としたときに得られた因子分析結果で，負荷量が0.4以上だった30項目を，今回の分析対象とした。

主因子法により固有値1.0以上を基準として8因子までが抽出され，ヴァリマックス回転が行われた。しかし，因子の解釈が困難だったため，あらためて，Azumaらの結果にならい，因子数を5に指定して因子を抽出したところ，各項目毎の因子負荷の分布は，彼らの結果によく似た結果が得られた（Table 2）。これは，評定する対象がイメージされた「頭

Table 1　知的自己意識67項目中の平均得点上位５項目及び下位５項目

	愛教大（男） n＝61	愛教大（女） n＝69	A短大（女） n＝53
上位			
1位	好奇心旺盛 3.31（.81）	好奇心旺盛 3.16（.80）	好奇心旺盛 3.34（.65）
2位	常識がある 3.30（.68）	誤りを素直に認める 2.91（.85）	いつも明るい 3.30（.82）
3位	思いやりがある 2.95（.76）	いつも明るい 2.90（.73）	思いやりがある 3.13（.65）
4位	誤りを素直に認める 2.92（.84）	人の立場になって考える 2.84（.76）	誤りを素直に認める 3.11（.87）
5位	人の立場になって考える 2.90（.81）	人の話をよく聞く 2.75（.86）	人の立場になって考える 3.11（.75）
同点 5位	—	思いやりがある 2.75（.69）	—
下位			
1位	字がきれい 1.80（1.01）	よく勉強する 1.86（.73）	感情表現が少ない 1.74（.76）
2位	筆まめ 1.90（.85）	多芸 1.86（.86）	よく勉強する 1.81（.79）
3位	よく勉強する 1.92（.90）	時間の使い方がうまい 1.87（.64）	学校の成績がいい 2.00（.63）
4位	文章がうまい 1.95（.92）	芸術的センスがある 1.94（.84）	知識豊富 2.09（.63）
5位	顔がキリッとしている 2.03（.80）	顔がキリッとしている 1.94（.84）	理路整然と話す 2.13（.76）
同点 5位	多芸 2.03（.80）	—	—

注．数字は平均得点（標準偏差）を示す

Table 2　知的自己意識30項目の因子分析結果　（n＝183）

		F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	共通性
1	つきあい上手（社交的）	.77	.24	.09	.08	-.00	.66
2	話がおもしろい	.76	-.01	.13	.06	.16	.62
3	話題が豊富	.74	.03	.13	.21	.26	.68
4	話し上手	.71	.04	.09	.22	.22	.61
5	ユーモアがある	.70	.13	.10	.16	.08	.54
6	いつも明るい	.68	.12	.20	.08	-.07	.53
7	積極的	.59	.12	.22	.44	.04	.61
8	世渡り上手	.56	.10	.20	.10	.10	.38
9	話し上手	.55	.02	.09	.45	.01	.51
10	話のテンポが速い	.53	-.25	.08	.31	.26	.51
11	思いやりがある	.20	.75	-.03	.02	.03	.60
12	人の立場になって考える	.09	.71	.02	.10	.03	.52
13	気がきく	.19	.58	.12	.06	.02	.40
14	人の話をよく聞く（聞き上手）	-.11	.57	.04	.03	.07	.34
15	謙虚	-.15	.49	.26	-.06	-.04	.33
16	誤りを素直に認める	.07	.45	.22	.19	.03	.29
17	人を見る眼がある	.26	.41	.15	.05	.27	.34
18	自分の分を知っている	.15	.32	.21	.12	.28	.26
19	時間の使い方がうまい	.34	.17	.67	.16	-.04	.63
20	仕事をてきぱきと片づける	.10	.20	.58	.31	.16	.51
21	見通しがきく	.25	.33	.56	.22	.12	.56
22	事務処理能力がある	.07	-.01	.51	.09	.22	.33
23	計画性がある	.20	.18	.47	-.14	.02	.31
24	決断力がある	.36	.04	.20	.60	-.00	.53
25	鋭い	.28	.18	.26	.49	.28	.50
26	判断が早い	.27	-.05	.37	.46	.19	.46
27	独創的	.12	.14	-.04	.37	.19	.21
28	文章がうまい	.19	-.00	.05	.29	.60	.49
29	よく本を読む	-.05	.06	.09	.04	.54	.31
30	筆まめ	.27	.09	.12	.02	.48	.33
	固有値	8.14	2.61	1.41	1.04	.71	
	説明率(%)	27.1	8.7	4.7	3.5	2.4	計 46.4

のいい人」と「自己」というように異なっていても，同様の評定項目を用いる限り，その知能観の因子構造は，類似していることを示していて興味深い。頭がいい，ということは価値志向的なものであるが，そうした価値基準を内的に取り込む形で自己意識が形成されてきていることを示す結果かも知れない。

さて，Azuma らと類似した結果が得られたので，因子の命名も同じものを用いることとした。すなわち，第1因子が「ポシティブな社会的有能性」，第2因子が「受容的な社会的有能性」，第3因子が「課題の能率性」，第4因子が「独創性」，第5因子が「読み書き能力」である（なお，因子名の邦訳は子安（1989）によった）。

本研究では，こうして得られた各因子を代表する項目のまとまりが，自己意識の知的側面を示すものと捉え，各項目群毎の合計得点を，知的自己意識の下位尺度得点とした（以下の記述では，因子名をそのまま尺度名として用いている）。

2）知的自己意識と固定―発展型知能観及び自尊感情との関連

知的自己意識の下位尺度得点と固定的知能観，発展的知能観及び自尊感情の各尺度得点の相関係数を示したものが，Table 3である。1％以下を有意性の基準とした場合，知的自己意識は，自尊感情とはいくつかの下位項目で有意な相関を示している。ただし，これには男女差が見られる。愛教大の男子では，知的自己意識の5尺度は，いずれも自尊感情と有意な相関を示しているが，愛教大の女子では，尺度2の「受容的な社会的有能性」と尺度5の「読み書き能力」は，自尊感情と有意な相関を示さない。同様の傾向は，A短大の女子にも見られ尺度5は，同じく相関が有意ではなく，尺度2も1％水準に達してはいるものの，男子よりは弱い相関である。この結果は，当初の予想を支持するものである。ただ，どうして女子においては「受容的な社会的有能性」と自尊感情とが関連性が強くないのかについては，更なる検討が求められよう。伝統的な性役割観に基づけば，人間関係において受容的であることは，女性らしさを表す特性と考えられるものであろう。今日の女子学生にとって，そうした役割を受け入れ自己の重要な価値を持つものとすることが回避される傾向にあるのだろうか。あるいは，受容的であることは，当然すぎることであるがゆえに，自尊感情とは関わりが薄かったのだろうか。興味ある問題である。

次の関連分析に移ろう。知的自己意識は，固定的知能観とも発展的知能観とも，全く有意な相関を示すところがない（Table 3）。このことは，知能が固定的なものであるとみたりあるいは発展的なものであるとみたりする考え方（態度）と，自己の知的有能性に関する意識とは，相互に独立したものであることを示唆している。

3）知的自己意識と京大NX_{15-}知能検査との関連

知的自己意識の各尺度得点と知能検査の下位検査得点の相関係数をまとめたものが，Table 4である。1％以下を有意水準としてみたとき，有意な正の相関を持つ知能検査の下位尺度は，「1．類似反対語」と「12．単語完成」の2つの言語性能力に関わる尺度であった。関連する知的自己意識の尺度は，「1．ポシティブな社会的有能性」「4．独創性」「5．読み書き能力」の3つであり，特に独創性は，類似反対語と単語完成の両者に有意に相関していた。この独創性の尺度は，言語能力（特に語の流暢性と推測されるが）と，とりわけ関連の深いものだということができよう。本研究におけるこの尺度は，Azuma らの，因子分析結果より，やや含む項目が多くなっており，「独創性」という特徴づけだけではなく，問題解決の速さに関わる能力の自己評定に結び付いているといえるかも知れない。

Table 3　知的自己意識尺度得点と固定―発展的知能観得点及び自尊感情得点との相関

知的自己意識	固定的知能観			発展的知能観			自尊感情		
	愛教男	愛教女	A短大	愛教男	愛教女	A短大	愛教男	愛教女	A短大
尺度1 ポシティブな社会的有能性	.12	-.02	.13	.03	.05	-.02	.47**	.44**	.50**
尺度2 受容的な社会的有能性	.03	.24	.14	-.04	-.25	-.13	.41**	.25	.34*
尺度3 課題の能率性	.11	.08	.17	-.13	.18	-.23	.53**	.34*	.42*
尺度4 独創性	-.02	.14	.12	-.12	-.12	-.05	.51**	.38**	.47**
尺度5 読み書き能力	.02	.12	-.02	-.10	-.19	-.07	.34*	.15	.18

注．愛教男：愛知教育大学，男子（n＝61），愛教女：愛知教育大学女子（n＝69），A短大：女子のみ（n＝49）
＊：p＜.01　＊＊：p＜.001

Table 4　知的自己意識尺度得点と京大NX$_{15-}$知能検査の下位検査項目得点との相関
（A短大，女子のみ　n＝49）

知的自己意識	京大NX$_{15-}$ 1 類似反対語	2 重合版	3 計算法	4 マトリックス	5 文章完成	6 折紙パンチ	7 日常記憶	8 符号交換	9 図形分割	10 乱文構成	11 ソシオグラム	12 単語完成
尺度1 ポシティブな社会的有能性	.04	-.14	-.01	-.25	-.06	-.11	-.15	.07	-.15	-.09	-.10	.46**
尺度2 受容的な社会的有能性	-.22	.05	-.33*	-.12	-.15	-.05	-.17	.09	-.22	-.01	-.01	.04
尺度3 課題の能率性	.05	.12	.08	.04	.04	.04	.10	.22	-.07	-.06	.05	.31
尺度4 独創性	.40*	.00	.23	-.29	.25	-.20	.15	.00	-.20	.06	.21	.40*
尺度5 読み書き能力	.41*	-.21	.02	-.03	.32	-.01	-.07	-.16	-.29	-.02	.14	.05

注．＊：P＜.01　＊＊：P＜.001

なお，「2．受容的な社会的有能性」と，「3．計算法」との間に有意な負の相関がみられているが，これについては解釈困難である。

いずれにしても，認知された自己の能力の諸側面と正の関連がみられたのは，言語的な能力だけであった。このことは，意識的に捉えられる知的能力が言語的なものに偏している可能性を示すものである。今後，女子だけでなく男子においても，こうした傾向がみられるかどうか，検討すべき課題であろう。

（平成3年9月17日受理）

引　用　文　献

東洋　1989　教育の心理学　有斐閣

Azuma, H. & Kashiwagi, K 1987 Descriptors for an intelligent person : A Japanese study. *Japanese Psychological Research,* **29,** 17-26.

子安増生　1989　社会的知能の研究―文献展望―　京都大学教育学部紀要，**35,**134-153.

中川作一　1986　人格発達の危機への接近―自己像研究の立場から―　心理科学，**9**，34-52.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* Princeton : Princeton Univ. Press.

杉村伸一郎・吉崎一人　1990　子どもの知能観　珠算春秋，**72,** 14-28.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30,**64-68.

付表　自己意識の知的側面を評定するのに用いた項目
（Azuma & Kashiwagi （1987）より）

1	文章がうまい	35	学校の成績がいい
2	常識がある	36	要点の把握が正確
3	動作が機敏	37	鋭い
4	自分の分を知っている	38	人の話をよく聞く（聞き上手）
5	いつも明るい	39	察しがよい
6	よく勉強する	48	数的処理が得意
7	リーダーシップがある	41	思いやりがある
8	語彙が豊富	42	器用
9	おしゃれ（身なりがいい）	43	冷静
10	話し上手	44	現状に批判的
11	合理的な考え方をする	45	気がきく
12	人を見る眼がある	46	字がきれい
13	話がおもしろい	47	カンが鋭い
14	他人が自分をどう見ているか理解している	48	自信にあふれた行動をする
15	誤りを素直に認める	49	独創的
16	仕事をてきぱきと片づける	50	多芸
17	積極的	51	時の流れに敏感
18	頭の回転が速い	52	柔軟な考え方をする
19	理路整然と話す	53	損得に敏感
20	知識豊富	54	芸術的センスがある
21	皆の話をうまくまとめる	55	顔がキリッとしている
22	謙虚	56	臨機応変
23	記憶力がいい	57	ゲームに強い
24	事務処理能力がある	58	よく本を読む
25	眼が輝いている	59	多面的にみる
26	判断が早い	60	やりくり上手
27	要領がいい	61	ユーモアがある
28	つきあい上手（社交的）	62	筆まめ
29	タフな	63	計画性がある
30	人の立場になって考える	64	好奇心旺盛
31	世渡り上手	65	決断力がある
32	話のテンポが速い	66	時間の使い方がうまい
33	話題が豊富	67	見通しがきく
34	感情表現が少ない		